

精神科面接改善のために医療面接を活用する*

宮岡 等

北里大学医学部精神科

Medical interview should be more utilized in the training of a psychiatric interview

Hitoshi Miyaoka

Department of Psychiatry, Kitasato University School of Medicine

Abstract

There are almost no criteria to evaluate the psychiatric interview as it depends on the patient's diagnoses and the sociodemographic background. In the training of medical interview, communication skills are instructed and the interview skills are evaluated. In the training of psychiatric interview, the medical interview should be more utilized.

Key words

medical interview, psychiatric interview, communication skills, psychotherapy, personally identifiable information

Rinsho Hyoka (Clinical Evaluation) 2013 ; 40 : 415-7.

* 本稿は、第108回日本精神神経学会シンポジウム25(2012年5月25日(金)11:00~13:00,札幌コンベンションセンター 大ホールAB)「患者にやさしい医療面接」から「こころを癒す精神療法」への口演内容を整理して論文化したものである。

1. はじめに

精神科医が一般的に行っている面接に優劣があるのは当然であるが、患者背景の違いが大きいなどの理由で、面接自体の評価基準はほとんど示されてこなかった。同一学派の中ではある程度の優劣評価があったのかもしれないが、それに対して精神医学一般や周辺領域の専門家、あるいは一般社会の理解を求めようとする場面は少なかった。むしろ、精神科では患者ごとの性格や症状の差を考えると、面接内容が異なるのは当然であり、優劣評価自体が困難であるという考え方もあったように思う。そこに黒船のように現れたのが医療面接であった。医療面接は面接の評価基準を明らかにし、最低限行われるべき面接の指標を示した。

本シンポジウムのコーディネーター(齊尾武郎)は「現在、精神医療の質が問われており、ひとつが不適切処方、もうひとつが診察時の医師の心無い態度や発言である。今回は後者に焦点を当て、精神科の面接の基本を考えていく」と述べている。精神科面接では心無い態度や発言だけでなく、意義に乏しい面接も含めて十分検討し改善を図る必要がある。そのひとつの方法が精神科面接の基礎として医療面接を学ぶことであろう。精神科面接に取り入れる時、多少の修正は必要かもしれないが、医療面接は精神科面接の基礎となりうると考える。

2. 精神療法の問題点

以前、コーディネーターと話した時、精神療法の問題点として話題になったことをあげる。ある雑誌で「心理療法以前」という特集を組んだ時、前書きとしてとりあげたものである¹⁾。第1に、震災後、心のケアのため、被災地の子どもに絵を描いてもらうアートセラピーがかえって傷を深くする場合もあると日本心理臨床学会が忠告を出したことである²⁾。第2に、認知療法を受けているが、よくなるとか、かえって悪くなったと訴えて、

受診するうつ病患者に出会う機会が最近増えたように思う。職場環境は検討されないまま、うつ病としてリワークを実施されていた事例もある。薬物療法には副作用があるという事実は誰も疑わないが、精神療法にも副作用がある。しかし何となく精神療法やカウンセリングは、副作用がないとか、症状が良くなるにしろ悪くなることはないだろうという思いこみが広まって、本当に心理療法が効くのか、効果と副作用を勘案した上で適応があるのかという検討が等閑にされている。

第3に、医療面接が医学部の必修科目になって以降に卒業した医師をみて、基本的な患者とのやりとりが一部の精神科医より優れているのではないかと感じることもある。また特定の心理療法に関する知識は豊富なのに、患者、あるいは職場の同僚などとの基本的なコミュニケーションが下手である精神科医にもしばしば出会う。精神科や心理臨床に関わる者には、特定の心理療法の技術以前に基本的なコミュニケーション技法が教えられねばならない。

3. 精神科医が医療面接を学ぶ利点と問題点

精神科医が医療面接を学ぶ時の主な利点と問題点を表に示した(Table 1)。筆者が特に注目すべきと考えるのは、医療面接ではコミュニケーション技術に関する記載が多いこと、面接の評価方法を明示し、公開していることである。精神科面接自体を複数の者で議論することは、個人情報保護を考えると非常に難しいが、面接自体を透明化する努力は続けるべきであり、精神医療の透明化につながる可能性がある。とりあえずの策として、医療面接のように、面接の評価基準を公開し、他の精神科医、他の領域の専門家らが面接の質を評価できるように努めることは重要である。

また問題点としては、医療面接は診断のための情報収集が主な目的であるが、精神科面接では診断のための面接自体が治療の一部として働く可能性がある。

Table 1 Merits and demerits of learning the skills of medical interview by psychiatrists

利 点	1) 精神医学の教科書よりもコミュニケーション技術の記載が多い。 2) Advanced OSCEでとりあげられる対象（がん告知など）には従来の精神医学が弱いテーマも多い。 3) 面接における必須事項が具体的に示されている。 →面接を評価できる →診療内容の透明化につながる（精神医療の密室化を防ぐ）
問題点	1) 医療面接では精神現在症よりも解釈モデルや患者背景が重視されやすい。 2) 身体科における医療面接は情報の効率的な収集が目的であり、面接が治療として機能することはほとんどないが、精神科面接は面接自体が治療や治療の妨げになることがある。 3) 医療面接は一回の面接でできるだけ多くの情報を得ようとするが、精神科面接では急ぎすぎない方がよいこともある。

このような利点を生かし、問題点を克服しながら、医療面接を精神科面接の中で生かしていく必要がある。

4. おわりに

「精神科面接は症例の特徴の違いによって様々な面接がありうる」という考え方が強過ぎて、不適切な面接まで許容される傾向がある。このような状態を改善するために、最低限守るべき基準と

して医療面接を活用できる可能性は大きい。

文 献

- 1) 宮岡 等, 青木省三, 岡崎祐士, 編. 特別企画 心理療法以前. こころの科学. 2011 ; (160).
- 2) 日本心理臨床学会・支援活動委員会. 「心のケア」による二次被害防止ガイドライン《「心のケア」を目指すあらゆる方へ》. 2011 Jun 9. Available from : <http://heart311.web.fc2.com/guideline1.pdf>

* * *